

オイスカと共に歩んだ20年

インドネシア・スカブミ研修センター 所長 ムハマッド・ハリッド

訪日研修から戻った翌年にはセンターの農場長を任せられ、二度目の訪日研修を経て2007年に所長に就任。農業技術の高さに加え、研修生やスタッフを束ねるリーダーシップが備わった筆者は、自らの後継者となる青年の育成に力を注ぐ。20年の歩みを振り返り、センターの今、そしてこれからの語る。

オイスカと私

私が研修生としてオイスカ・ボゴール研修センター（現スカブミ研修センター）で学んだから20年が過ぎました。私は幼い頃からテレビで日本の時代劇に親しんでいたため、日本に深い関心を持っていました。親近感を抱くその国のNGOが農業研修を行っているのを知り、オイスカで学ぶことを決めたのは自分にとってごく自然なことでした。当時は所長をはじめ複数の日本人スタッフが開発団員として駐在していました。彼らの勤勉で真面目な姿勢は深く印象に

残り、今でも仕事に取り組み際の模範としています。

翌年、訪日研修の機会をいただきました。滞在中は西日本研修センターのスタッフだけではなく、地域の会員さんたちにも本当にお世話になりました。いつも感心していたことは、日本人の順法精神です。もちろんインドネシアにも法律がありますが、さまざまなルールがありますが、それを守らない人が多く存在しています。ただ、それがインドネシア人の発想の自由度の高さにもつながっているのかもしれないと感じています。日本人は守るものが多すぎて、ユニークな視点で物事を考えるこ

とが苦手に思えます。また、農業をしたり畑で体を動かしているのはお年寄りが多いように見受けられ、都市化、近代化が進んだせいか、若い世代には甘えがあるように感じていました。しかし、今となっては我が国でも同じような傾向が見られるようになり、少し心配をしています。

帰国後は農業指導に携わるべく、ボゴール研修センターに就職、翌年からは農場長や副所長という重責を担うことになりました。まだ経験の少ない20代半ばですから、同年代のスタッフをどうまとめたいか分からず、とても苦労をしました。苦しい

センターの人材育成

思いをしながらその時期を乗り越えてきた経験が、今では自分の日々の仕事を支えてくれています。

私が2007年より所長を務め、日々業務を行っている現在のスカブミ研修センター（以下、センター）について

少し説明させていただきます。センターでは9カ月の長期研修と1週間から4カ月ほどの短期研修の主に二つの研修コースで人材を育てています。長期研修では年間30名ほどがインドネシア全土から集まり、稲作や野菜を中心とした農業研修のほか男性は木工職業訓練、女性は生活改善（洋裁や食品加工、保健衛生など）と

プロジェクト開始に当たり住民対象の集会を行う筆者





スカブミ農産局より支援を受けたグアバの苗木に実がついた。現地政府と良好な関係を築きながら活動を展開している

いった科目を学んでいます。短期研修は高校生や大学生のほか、農業学校の先生や農家グループなどから年間200名前後を受け入れています。以前はセンターのあるスカブミ県周辺の若者だけだったのが、今ではインドネシア東部のパプア州や西ヌサテングラ州、スマトラ島からも来るようになりまし。日頃センターの研修の様子をよく見ている自治体や各種団体からは「オイスカは農業研修を通じて若者の規律訓練や人格形成をしている」と評価いただくことが増え、私たちスタッフも自信を持って人材の育成に当たっています。

各種プロジェクトも展開

センターが評価されている理由として、研修にとどまらず地域の発展につながるさまざまな活動にも力を入れていることが挙げられると思います。環境教育や女性生活改善といったプロジェクト推進がそれです。オイスカで育った人材がスタッフとなり、直接地域に出向いてこれらのプロジェクトを実施しています。さらに、センターを単立ち自分の農場や会社を運営している研修生OBたちが、地域住民の雇用を促進している点も大きいでしょう。人を育てることは大切なことだと実感しています。

多くのプロジェクトは日本からの支援により実施されました。例えば味の素(株)による「食と健康」国際協力支援プログラムや三菱商事(株)支援による緑化活動などがあります。味の素のプログラムは、農村女性のエンパワメントを通じた食生活環境の改善と地場産業の育成を目的としたもので、昨年度終了はしましたが、日本の外務省の

「日本NGO連携無償資金協力」による大型プロジェクトに発展しました。「主婦の能力強化を通じた地域の生活改善と生計向上支援事業」です。イスラム教徒が多いインドネシアでは都市部を除き、多くの既婚女性は家にいるべきとの考えが根強く、社会との関わりが薄い彼女たちにとって、自分の持つ可能性を見出すことは簡単ではありません。そのような女性たちを対象にしたこのプロジェクトでは、

家族の健康的な生活を支えるのは女性であることの自覚を促し、そのための知識や技術を身に付けてもらっています。例えば自宅の土地を活用した家庭菜園で家族が食べる野菜を育て、栄養や食品加工について学びます。食生活の改善と家計の節約も実現できるようになると女性たちは自信を持ち始め、よりよい人生を歩み始めます。こうした活動は地域全体の発展にとっても効果的だと考えています。

これからのセンター像

かつてセンターの主な活動は、研修生への農業指導でし



仕事をしながら大学でアグリビジネスを学んだ(2014年)

たが、今ではこうした地域開発プロジェクトも大きな柱となつていきます。それは地域のニーズに応えようとしてきた結果であり、また私たち現地スタッフもそれらを担う力を付けてきた結果であるともいえると思います。運営のすべてを日本人スタッフに委ねていた時代を経て、今では日本人に頼りすぎることなく、しかもオイスカの活動目的から外れることなく、自分たちのアイデアを活かしながらセンター運営ができるようになっていきます。これは大きな成長ですが、資金的にはまだ日本からの支援に頼っているのが実情です。これからは所長として、本当の意味でのセンターの自立を目指していきたいと思つていきます。

まずやらなければならぬのは土地の購入です。センターの土地はスカブミ県から借りたもので、長期使用権を取得することは法的に難しく、将来にわたり使用できる保証

がないためです。そこで、オイスカとして土地を購入し、スタッフやOBたちとアグリビジネスに取り組み、自立のための資金源を確保していきたいと考えています。次に不可欠なのはスタッフの能力開発です。私も昨年、自らのスキルアップのため、業務の傍ら大学でアグリビジネスを学びましたし、現在も2名のスタッフも、大学で学士あるいは修士の取得を目指しています。より多くのスタッフが個人の資質を高めることで、センター全体が向上し、地域の発展に貢献していけるものと思つていきます。これからもスタッフ一丸となつて、頑張つていきます。

Profile

ムハマッド・ハリッド

1994年に高校を卒業。翌95年に当時ボゴール県にあったオイスカのセンター(現スカブミ研修センター)で農業を学ぶ。96年の訪日研修でさらに農業技術を高め、帰国後は同センターのスタッフに。98年に農場長と副所長に就任。2002年、農業指導コースで学ぶため二度目の訪日を果たす。07年より現職。一男二女の父。今月、家族が一人増える予定。